新富町文化財調査報告書　第 29 集

町内遺跡 16

平成11年度町内遺跡発掘調査概要報告書
(春日地区遺跡 1 次・祇園原地区遺跡 4・5・6 次・越馬場遺跡 1 次)

2000

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

序

新富町の文化財保護については日頃から深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

本年度も町内の開発行為にともなう３遺跡を発掘調査をいたしました。

春日地区遺跡は祇園原古墳群の南部に位置し、今回の調査で墳丘の消滅した円墳１基が発見されました。祇園原地区遺跡も同古墳群の中心地で、円墳の周溝が３基検出され、馬の埋葬土壙が２基発見されました。いずれも祇園原古墳群の全容を明らかにしていく重要な基礎資料です。

越馬場遺跡はこれまで未確認だった中世山城です。出土遺物は土器片２点のみですが、深さ2.5mの堀や、曲輪の一部を調査することができました。

本町はこれら文化財の保護を推進し、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

平成12年３月　　新富町教育委員会　教育長　清　　郁　雄

例　言

1．本書は平成11年度に宮崎県児湯郡新富町教育委員会が実施した周知の遺跡地における緊急発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は、一部を除き国庫補助事業「町内遺跡発掘調査等」を適用して行った。
3．各遺跡の調査期間は本文中の表１～３に明記した。
4．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測にて作成した200分の１測量図をもとに作図した。
5．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。
6．遺構実測は、有馬義人、新森美穂、小守容子、大原一彦がおこなった。
7．遺構・遺物の写真は有馬が撮影した。
8．整理作業は有馬、新森、小守で行い、遺物実測及びトレースは有馬が行った。
9．本書の執筆・編集は有馬がおこなった。
10．出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会社会教育課に保管してある。

本文目次

1．はじめに …… 1～4ページ
2．春日地区遺跡 …… 5～9ページ
3．祇園原地区遺跡４・５・６次調査 …… 10～13ページ
4．越馬場遺跡 …… 14～17ページ

新富町位置図

1．はじめに

Ⅰ．新富町の位置と概要

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に位置し、県庁所在地である宮崎市から約20km北にある。北西部から南東部にかけては一ツ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。町面積は南北約７km、東西約９kmの約61k㎡で、隣接する市町村には西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町がある。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業で、台地の中心部には陸上自衛隊新田原基地があるため「やさいと基地の町」のイメージが強い。人口は約19,000人で、近年の道路交通網の整備にともない宮崎市への通勤時間が短くなったことや、宮崎市周辺の不動産価格の高騰により、本町での宅地開発が活発になっているため、不況下にあっても人口は緩やかな増加傾向にある。

Ⅱ．新富町の文化財保護

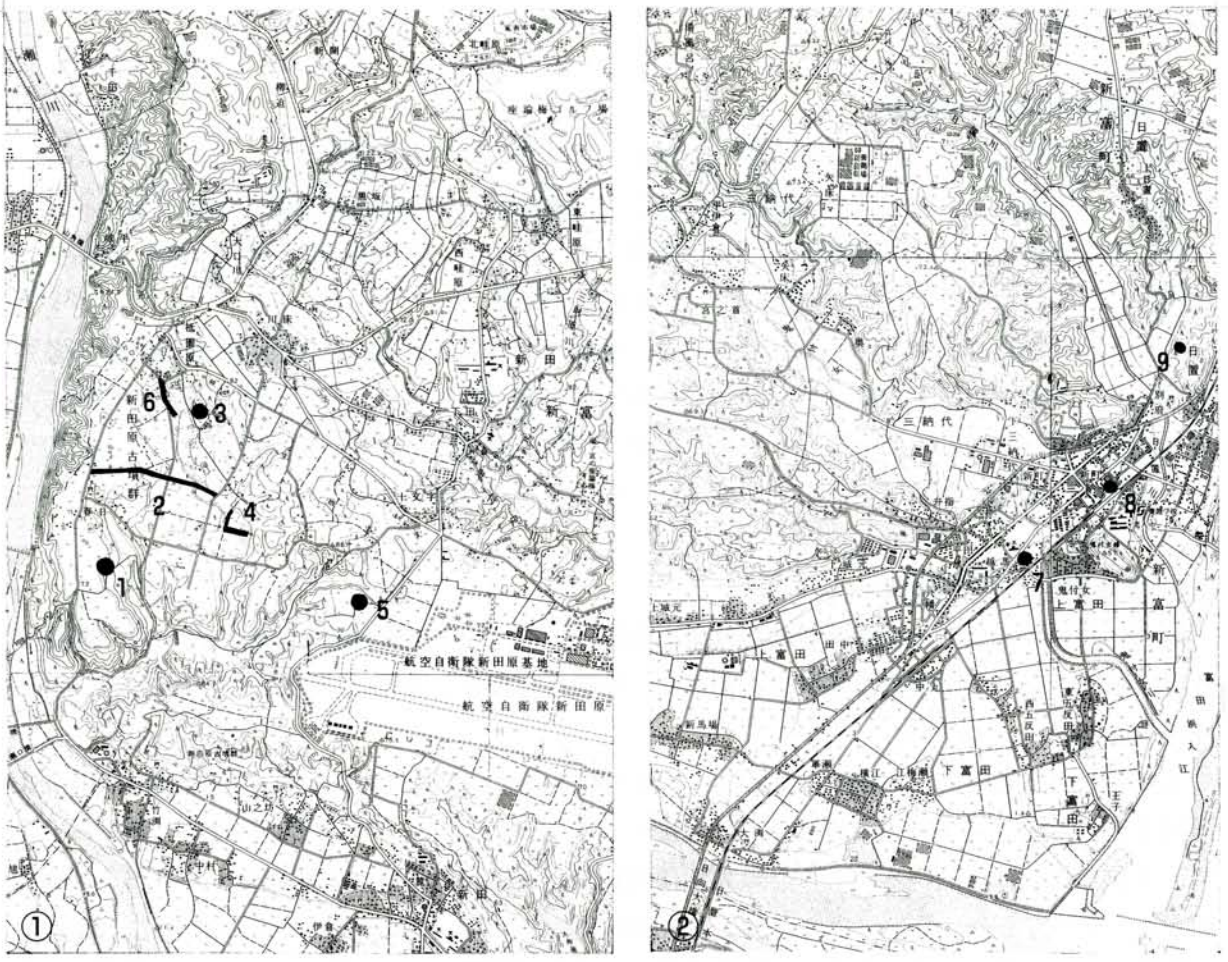
町では昭和43年に文化財保護審議委員会を設置し、町内の文化財保護を推進している。指定文化財は国指定２、県指定２、町指定６があり、内訳は史跡２、天然記念物３、無形民俗３、有形文化財２である。

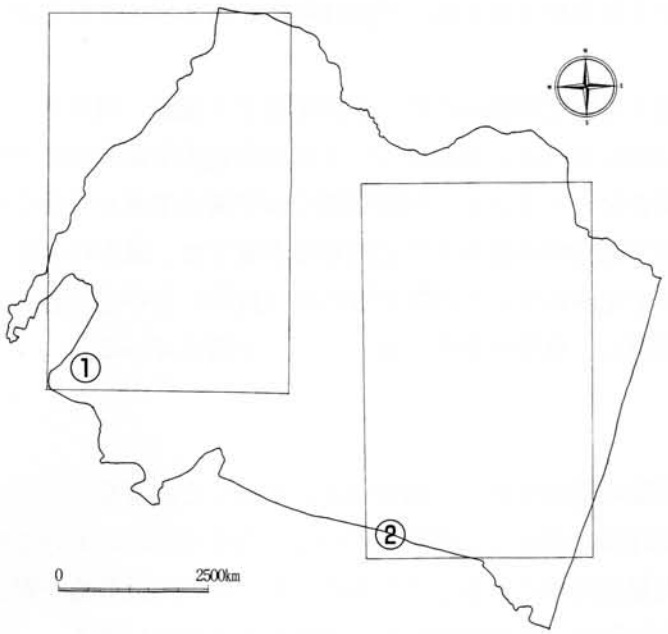
天然記念物には湯之宮座論梅・春日のイチョウ・アカウミガメがある。湯之宮座論梅は樹齢200年以上の古木で、下草管理と徒長枝剪定を行っている。春日のイチョウは樹齢200年以上の古木で、下草伐採を行っている。アカウミガメは列島的な海岸面積の減少に関係してか毎年上陸頭数が少なくなっており、県下一斉の保護対策が求められている。無形民俗文化財には湯之宮棒踊り、元禄坊主踊り、新田神楽がある。後継者不足から活動が停滞している団体もあるが、各団体の自助努力により活発な活動が行われている。補助や活動機会の提供も検討すべきである。有形文化財には三納代神社の釈迦如来座像と厳島神社の薬師如来立像がある。これら以外にも保存状態の良くないものや製作年代の古いものが多数存在するため、平成10年度から九州大学菊竹淳一教授に依頼し状況調査中である。

埋蔵文化財は開発行為によって消滅する頻度が高いため、年間を通じて調整・調査を行っている。本町の埋蔵文化財調査については後に述べる。史跡については国指定新田原古墳群の史跡整備を進行中で、平成９年度から発掘調査を行っている。短期整備では平成15年度から墳丘復元等の大規模整備を計画中である。また町で進行中の総合文化公園整備事業では、既存の文化会館のほかに図書館・歴史資料館を建設する予定があり、この歴史資料館（仮称）を中心に古墳群やその他文化財にガイダンスや案内板を設置し、見学や学習に寄与しようと考えている。

Ⅲ．埋蔵文化財の調査

1982年の遺跡詳細分布調査以降、周知の遺跡を中心に開発行為に対応した調査を行っている。文化財専門職は昭和60年に配置し開発行為に対応して調査している。近年の町内における開発行為は区画整理や畑地のほ場整備など大規模開発が終息しつつある一方、東九州縦貫道や県道の整備にともなって周辺の小規模開発（宅地開発・町道整備など）が多発する現状にある。





1．春日地区遺跡
2．祇園原地区遺跡（第４次）
3．百足塚遺跡
4．祇園原地区遺跡（第５次）
5．新田原Ｂ遺跡
6．祇園原地区遺跡（第６次）
7．越馬場遺跡
8．今別府Ｂ遺跡
9．越田遺跡

第１図　平成11年度に発掘調査した遺跡（１／50,000）

本年度の調査は以下の体制で行った。

総　　括　清　　郁雄　（新富町教育委員会教育長）
　　図師　　勉　（同　　社会教育課長）
　　富田　次男　（同　　社会教育課長補佐兼社会教育係長）
庶　　務　山崎　和子　（同　　社会教育課副主幹　庶務担当）
調整・調査　有馬　義人　（同　　社会教育課主事　文化財担当）
調査補助員　新森　美穂　（同　　社会教育課嘱託　埋蔵文化財調査補助員）
指　　導　重山　郁子　（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係）
参加学生　芝原　知行　（天理大学文学部文化財学科３年生）
　　杉岡　栄治　（天理大学文学部文化財学科２年生）
作　業　員　小守容子、大原一彦、杉尾美千子、日野仁美、野尻富子、滝口則雄
　　滝口恵美子、日野　君代、岩下ヨシ子、新恵トシ子、出井　クニ
　　江口　栄子、河野　隆子、長友　幸枝、寺原　利雄、岩本　　栄

本年度の調査は本調査８カ所、試掘調査２カ所、立会調査８カ所である。内訳は農業関連14、区画整理２、民間開発１、史跡整備１である。このほか近年では東九州縦貫道の調査やそれに関連する県道の調査が多く、県埋蔵文化財センターで計３箇所の試掘調査が実施されている。

平成11年度 発掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内容	備考
1	春日地区	新田字花園	4/27～ 6/30	本部昇	2,000	畜舎建設	消滅墳の周溝１
2	祇園原地区４	新田字古開	7/ 1～ 8/13	児湯農林	2,681	一般農道６	路線区間に遺構
3	祇園原地区４	新田字古開	7/ 1～ 8/13	児湯農林	2,095	一般農道16	路線区間に遺構
4	百足塚古墳	新田字東俣	8/17～ 3/31	新富町	2,000	史跡整備	前方後円墳の周溝調査
5	祇園原地区５	新田字出口	11/ 1～11/30	児湯農林	418	一般農道18	中世ピット群と弥生の住居１
6	祇園原地区５	新田字原口	11/ 1～11/30	児湯農林	429	一般農道19	縄文の集石遺構１基
7	祇園原地区６	新田字曲久保	12/ 1～12/21	児湯農林	1,187	一般農道７	周溝３、土坑２、竪穴住居１
8	越馬場遺跡	上富田字越馬場	1/ 5～ 1/31	新富町長	3,154	区画整理	中世山城

平成11年度 試掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内容	備考
1	今別府Ｂ	三納代字今別府	7 /21	九州セルラー	4	電話通信	地山は砂層で、深く攪乱
2	越馬場	上富田字越馬場	12/ 1～12/28	新富町長	500	区画整理	２ｍ以上の堀検出　本調査へ

平成11年度 立会調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内容	備考
1	祇園原地区	新田字新開	9/20	児湯農林	899	一般農道17	既堀されていたため、即工事
2	祇園原地区	新田字新開	10/19	児湯農林	547	農地保全５	既堀されていたため、即工事
3	祇園原地区	新田字向原	11/ 4	児湯農林	207	農地保全10	既堀されていたため、即工事
4	祇園原地区	新田字向原	11/18	児湯農林	200	農地保全11	既堀されていたため、即工事
5	祇園原地区	新田字向原	12/ 6	児湯農林	60	農地保全９	既堀されていたため、即工事
6	越田遺跡	日置字越田	2/ 1	黒木	8,000	土砂採取	昨年度一部調査　遺構なし
7	新田原Ｂ	新田字新田原	1/28	児湯農林	1,394	一般農道１	工事深20cmで攪乱多し
8	祇園原地区	新田字西俣	12/ 2	児湯農林	530	農地保全７	既堀されていたため、即工事

Ⅳ．文化財啓発活動

生涯学習や学社融合の一環として、町内外から文化財についての講演や見学会、勉強会等の要望が寄せられることが多い。町教委ではこれらの要望に応えるため、文化財の普及啓発活動の一環として下記の事業を行った。

月日	内　　容	講師・担当	対　象	人数
4/20	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	上新田小６年	120
4/27	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	富田小６年	40
5/11	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	富田小３年	120
5/21	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	新田小３年	100
5/19	出土遺物の見学（文化財整理室見学）	有馬	上新田小３年	40
5/10	湯之宮座論梅の学習（梅の説明・収穫）	有馬	上新田小５年	50
8/21	子ガメを送る会（あかうみがめについて）	宮崎野生動物研　石井正敏氏	町内外希望者	200
8/17	町教職員初任者研修（町内文化財研修）	有馬	教職員初任者	3
11/20	古墳祭記念事業「新田原古墳群の時代」	宮崎大学　柳沢教授	町内外希望者	100
5/19	郷土史講座①「古墳について」	有馬	郷土史講座生	30
8/31	郷土史講座②「岩脇の化石層について」	横浜国立大学　間島助教授	郷土史講座生	50
3/31	郷土史講座③「町内の仏像・神像について」	九州大学　菊竹教授	郷土史講座生	20
11/ 6	古墳について（見学会）（講演会）	有馬	富田中２年	120
年内	富田小学校文化財愛護少年団活動	有馬	富田小５年	10
1/28	社会教育指導員研修（古墳群見学）	有馬	郡内指導員	20

古墳見学会

新田原古墳群記念講演

2．春日地区遺跡

Ⅰ．位置と調査の概要

祇園原古墳群の分布域のうち大字新田の春日地区一帯を総称して春日地区遺跡という。祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上標高70～90mに分布し、台地上に入りこむ谷によって、４つのグループに大別できる。春日地区遺跡はそのうちのＤグループにあたり、前方後円墳１基、方墳１基を含む33基の国指定墳が現存する。

春日地区遺跡一帯は戦前には山林開拓が、昭和43年には圃場整備の手が入り、墳丘の掘削や周溝部の削平が進んでいた。町教委では、昭和63年に国指定141号墳近くにて地下式横穴１基（花園地下式横穴墓）を調査した。また平成４年度と同６年度に国指定159号墳周辺畑地を地中レーダー調査し、消滅墳２基と国指定159号墳周溝および地下式横穴竪坑を確認している。

今回の調査は遺跡東部に計画された畜舎建設予定地を対象とした。発掘調査に先行して調査区を含む長辺100m、短辺50mを1/200スケール・25cm間隔の等高線表記で測量した（第３図）。その結果、指定墳はかなり削平されているが、もとはそれぞれが墳径10m以上を有し、台地の東端部に沿って築造されていたことが予想される。

次にアカホヤ火山灰層上面を遺構検出面として表土掘削すると、予想以上に地山が攪乱されており、国指定161墳と同163号墳の周溝は検出できなかったが、これら指定墳の間から墳丘の消滅した周溝が１基（１号周溝）が検出できた。

１号周溝は浅い箇所で６cm、深い箇所でも28cmであったが、ほぼ完堀でき、その埋土から須恵器９個体と19片、土師器４個体と９片、縄文土器１片が確認できた。

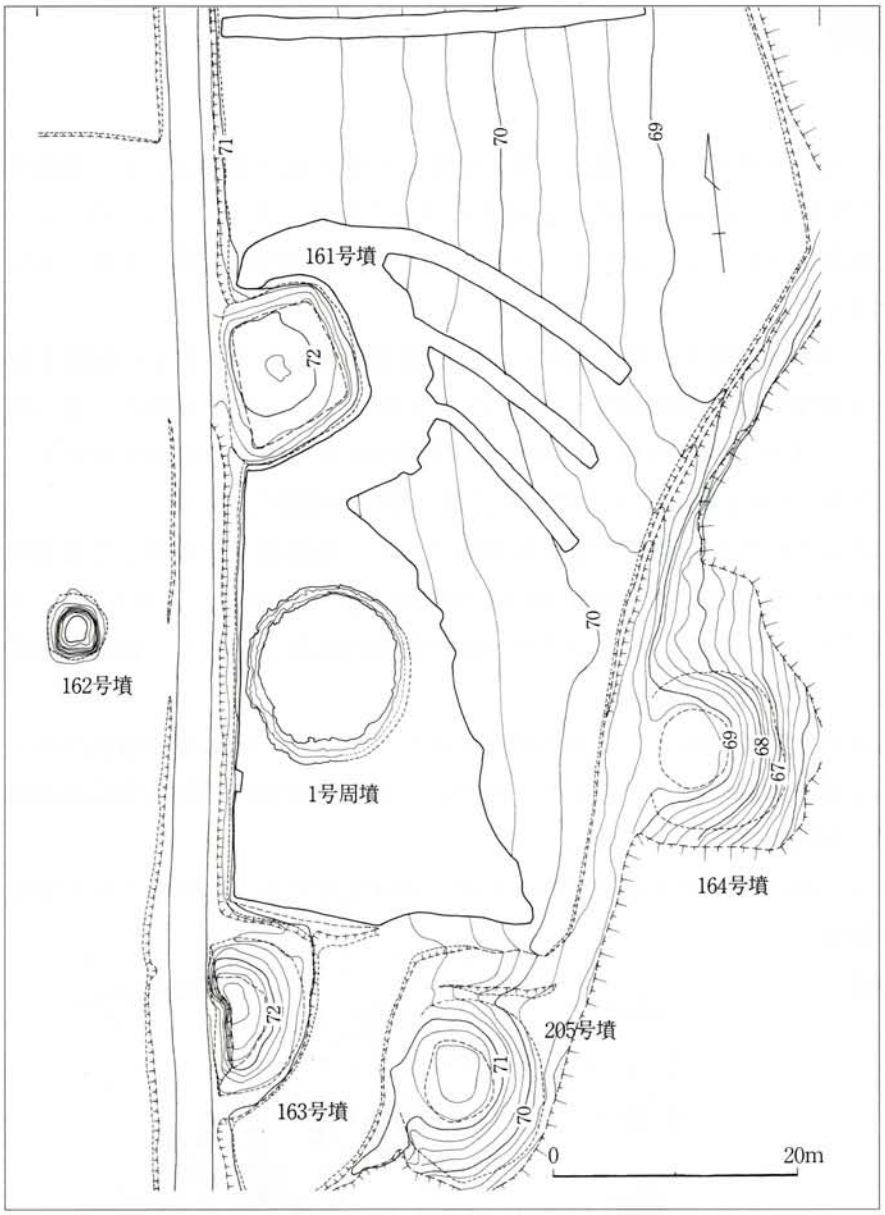
第２図　春日地区遺跡（１／4,000）

Ⅱ．遺構と遺物

(1)　遺構

１号周溝は長径14.5m、短径13.5mを計る。深さは検出面から浅い箇所で６cm、深い箇所で28cmである。東側は特に周溝の遺存度が低く、周溝外側が削平されている。周溝堀方は少なくとも７箇所以上の作業単位が認められ、深さが違う箇所や輪郭が円弧を描かない箇所がある。

周溝埋土には遺物が少なく、地山の固まりを含む黒褐色土が多い。一度掘方を行った後、深堀した箇所などを被覆調整した可能性が高い。



第３図　春日地区遺跡（１／600）

遺物は西側周溝内に多く、特に南西部に集中する傾向にある。土器の集中した箇所では、須恵器蓋杯が３セット、提瓶１点、土師器が認められ、碗と甕はやや離れて出土している。

墳丘が削平されているため、埋葬主体部は不明である。周溝内に地下式横穴の竪坑や土壙は検出されていない。

(2)　出土遺物

①　須恵器

杯蓋、杯身、提瓶、碗、甕の器種がある。

杯蓋（１～３）

底部のヘラ削りが1/3弱の個体である。口縁径は１が14.5cm、２が13.5cm、３が15.5cmで、高さはそれぞれ5.0cm、4.5cm、3.4cmである。

杯身（４～７）

いずれも立ち上がりが１cm弱である。４が口径12.4cm、高さ4.2cmで、２が口径11.9cm、高さ4.2cmである。６、７は同一個体の可能性が高い。

碗（８）

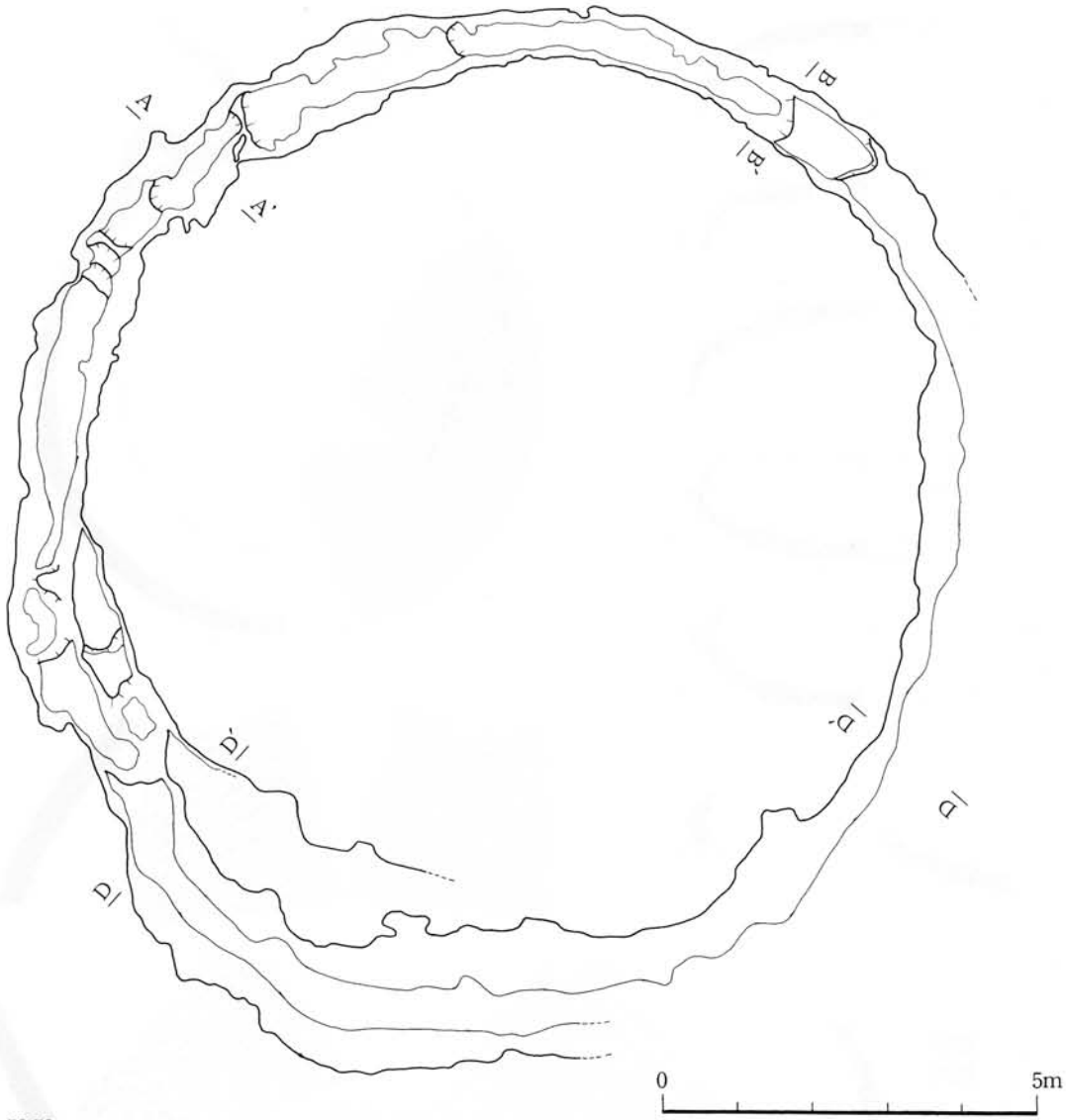
胴部幅10.5cmで胴部に連続刻み目文、頚部に波状文を施す。口縁は欠損しているため全高は不明である。

提瓶（９）

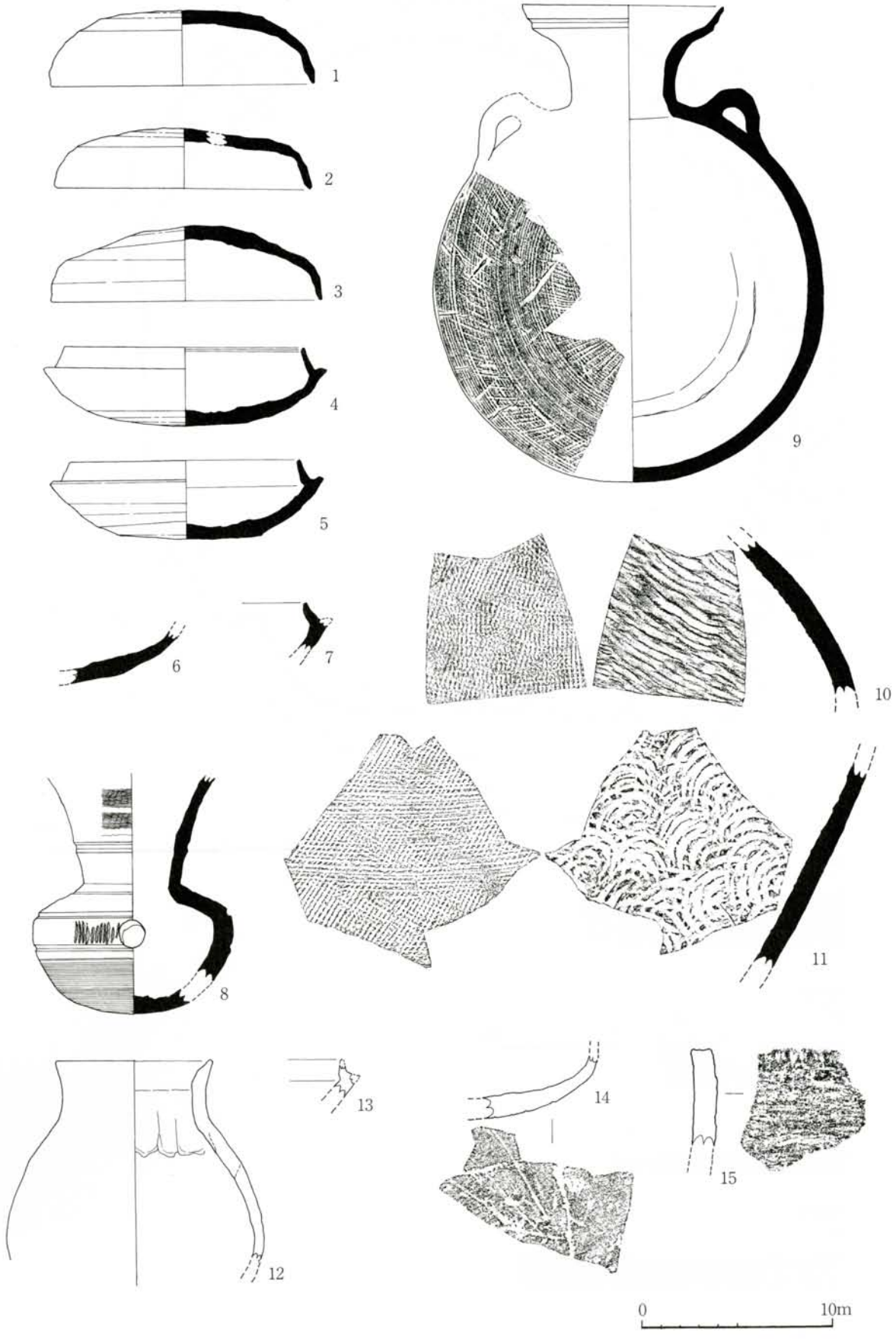
全体の約６割が復元できた。高さは25.1cm、胴部最大幅20.4cm、口縁径10.5cmを計る。取手は体部に接着している。胴部一面にはカキメの後に放射状の刻み目文が施されている。

甕（10，11）

外面にはタタキの後にカキメを施し、内面に青梅状の充具痕を明瞭に残す。口縁部がないので全体の復元径は求められないが、少なくとも径80cm以上の中形甕であろう。ほかに13片が出土しており、いずれも同一個体である。



第4図　1号周溝（1/100：下は土層断面で1/50）



第5図　出土土器（1/3）

② 土師器

短頸壺、杯、椀、甕がある。完形品はなくいずれも小片で、特に甕片５㎜から１㎝の小片である。

短頸壺（12）

底部を復元できなかったが、胴部径は15㎝内外であろう。外面にはミガキの後、赤色顔料を塗布している。内面はナデで、口縁部は指オサエで整形している。

杯身（13）

須恵器を模倣した杯身であろう。立上がりから受部にかけての１㎝程度の小片である。内外面に赤色顔料が塗布してある。

椀（14）

底部片である。いわゆる木の葉底で、痕をナデ消してある。

③ 縄文土器（15）

横４㎝、縦３㎝の小片である。外面がハケ、内面にナデ調整を施し、口唇端部に刻み目を施している。砂粒が細かい白色粒が多く、焼成は脆弱である。

Ⅲ．まとめ

須恵器のうち杯身はＭＴ85型式からＴＫ43型式併行期(1)に該当する。当該期は祇園原古墳群における群集墳築造の最盛期(2)で、１号周溝はまさにそのうちの１基である。

祇園原古墳群Ｄグループでは、１号周溝のほか、以前の調査で発見されたものを含めると、前方後円墳１基、方墳１基、円墳34基（墳丘消滅４基）になる。今後も当地区における開発行為との調整を行い、全体像が判明するよう補足調査する。

(1) 増田一裕「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』19号土曜考古学会 1995

(2) 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号宮崎考古学会 1998

3．祇園原地区遺跡４・５・６次調査

Ⅰ．位置と調査の経緯

祇園原古墳群の北部にあたるＡ～Ｃグループが所在する台地面全体を祇園原地区遺跡と総称している。平成４年度には祇園原地区遺跡のほぼ全面におよぶ圃場整備が実施され、この際の調査を１次調査、平成９年度の一般農道ほかにともなう調査を２・３次調査としている。本年度は同じく一般農道整備事業を原因とし、４・５・６次調査を実施した。

祇園原古墳群Ａグループは前方後円墳14基を含む古墳時代後期を中心とした古墳群で、径30m程度の中小円墳を含んだ階層構成型の群構造を示す。今回の調査ではＡグループの中央部（４次）、同南端部（５次）、65号前方後円墳西側（６次）を調査した。

Ⅱ．遺構・遺物の概要

①　４次調査

一般農道６号線と同16号線を調査対象とした。両路線とも祇園原古墳群Ａグループに位置し、古墳群を東西に横断する。６号線は幅６ｍ、延長500m、面積2,681㎡、16号線は同じく幅６ｍ、延長382m、面積2,065㎡が工事範囲である。施工時の掘削深（50～70㎝）がアカホヤ層直上に近いため、バックフォーによる表土掘削にあわせて遺構検出に努めた。

その結果、両区間とも圃場整備時の掘削が深い箇所が多く、遺構は皆無であった。

６号線の調査では近接して指定墳118・119号墳あったため、それらの墳丘測量を行っている。

118号墳は現状で径約10m、高さ約1.3mの円墳で、西側が大きく掘削されている。172号墳は現状で径約15m、高さ約1.5mの円墳で、東側が掘削されている。

②　５次調査

一般農道18号線・19号線が調査対象であった。祇園原古墳群の南東端部に位置し、古墳群の南東部端にあり、南方約100mには円墳１基が単独で立地している。

18号線は幅４ｍ、延長125m、面積418㎡、19号線は幅５ｍ、延長97m、面積429㎡で、北と東に向けて延びるＬ字状の範囲を調査した。バックフォーによる表土掘削後、遺構検出を行った。

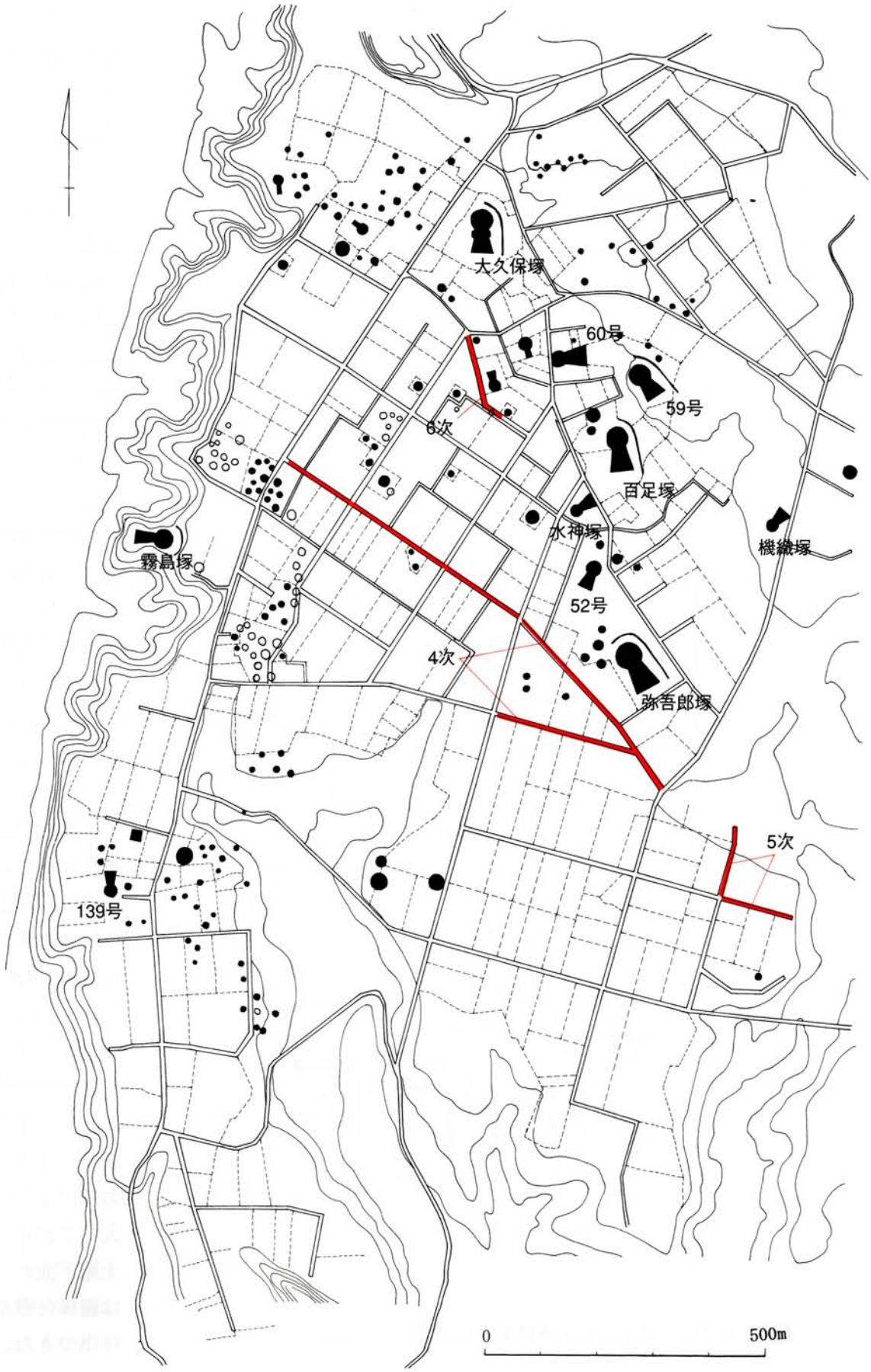
18号線では土師器片や弥生土器片の混入したピット38と竪穴住居１を検出した。ピットの多くは並びが不均一で、掘立柱建物であったか判然としない。

竪穴住居は調査区北側壁沿いで確認できたが、方形プランの住居址の隅角の一部（約２㎡）であったため、規模・構造等はわからない。狭い範囲から弥生土器片数点と鉄器片３点が出土している。

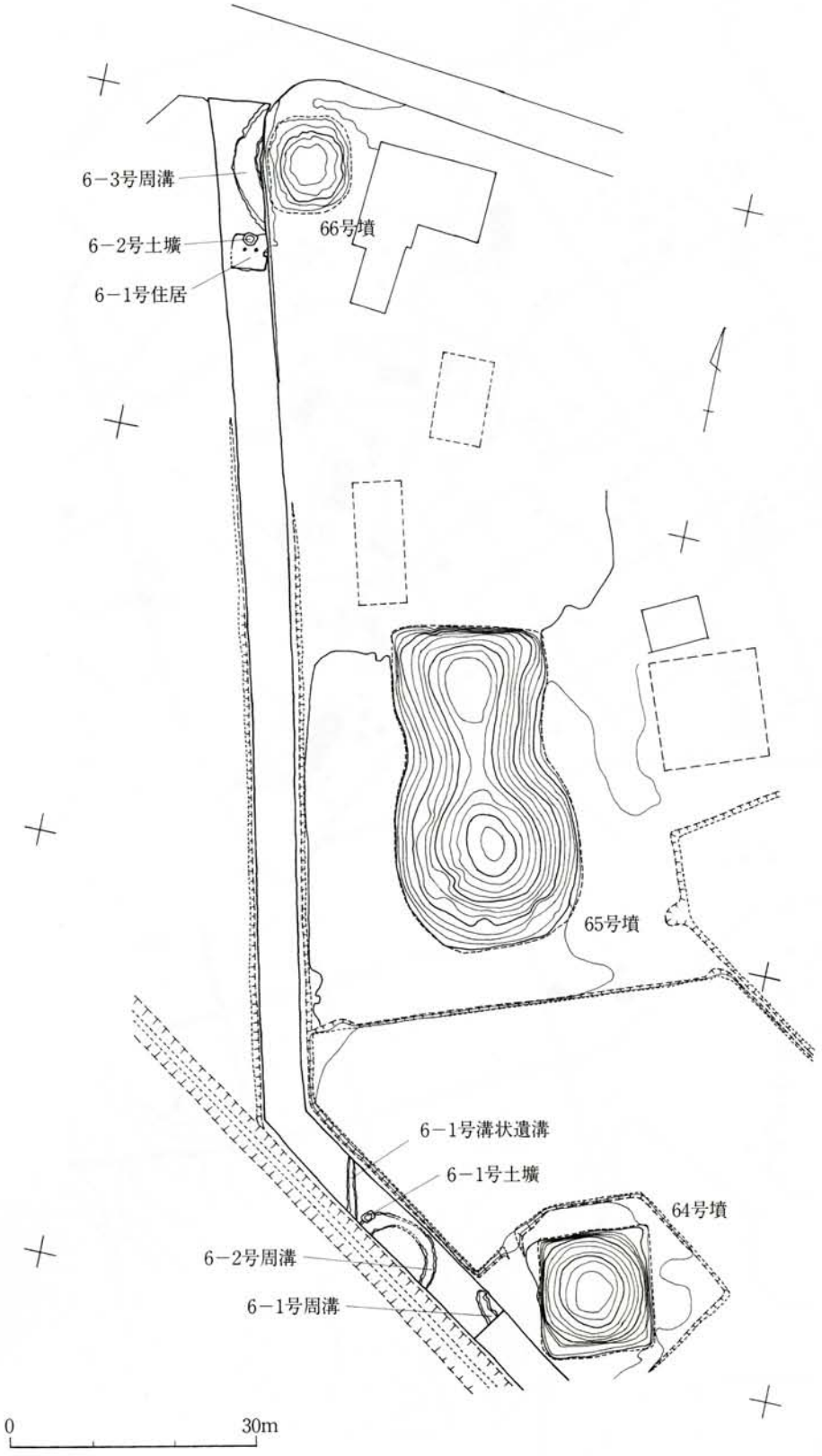
19号線からは西側から土壙１基、東側から集石遺構１基が検出できた。土壙からは弥生土器が、集石遺構からは縄文草期の押型文土器１点が検出できた。（第９図）

③　６次調査

一般農道７号線の北側を調査した。同路線は国指定65号墳に沿い、その調査区は幅６ｍ、延長218mの1,187㎡の範囲に及ぶ。表土掘削は南から始め、遺構のない箇所をはさんで１区、２区と区分した。



第６図　祇園原地区遺跡（１／10,000）



第７図　祇園原地区遺跡第６次調査（１／800）

ほぼ全面にわたってアカホヤ火山灰層が遺存しており、南側がやや削平傾向にある。

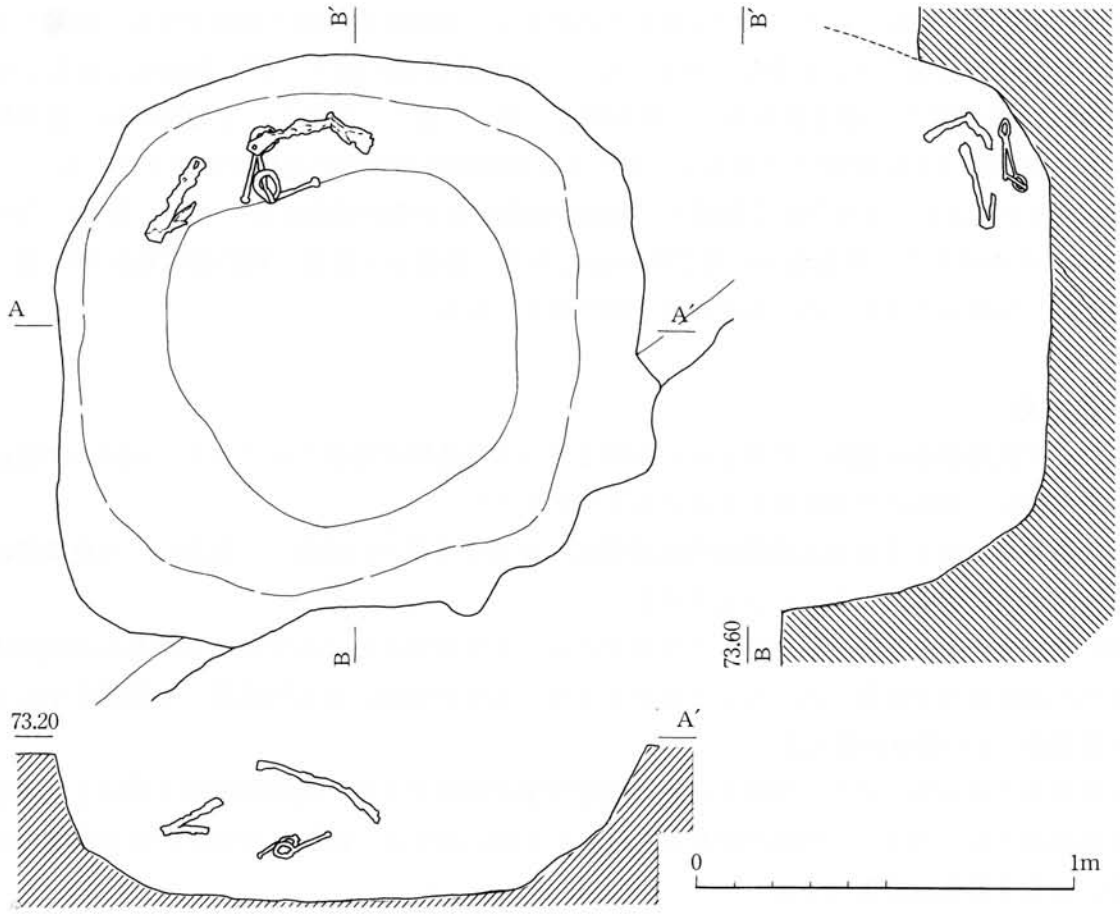
近接する指定墳には円墳２基（64号・66号墳）、前方後円墳１基（65号墳）がある。

１区では指定64号墳の周溝（６－１号周溝）と消滅墳の周溝（６－２号周溝）が検出できた。

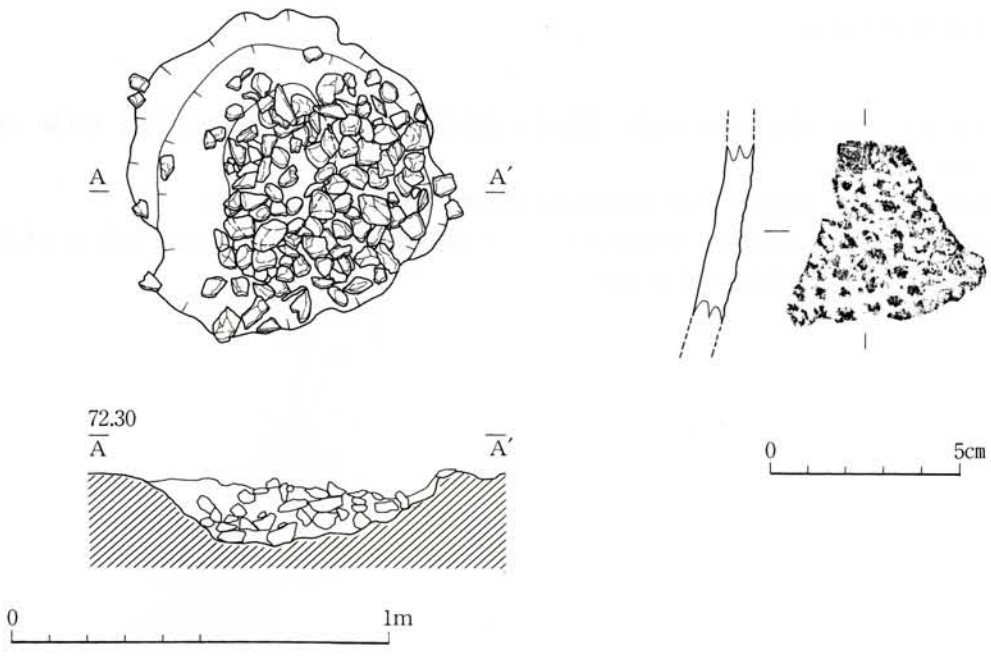
いずれも浅く、部分的に攪乱されているが、６－２号周溝北側には長幅0.8ｍ、短幅1.5ｍ、深さ1.3ｍの土壙が検出できた。　土壙埋土には大小の地山塊が混入しており、土壙下面からは鏡板付轡が検出できた。

馬の埋葬土壙であると考えられる。

２区では国指定66号墳周溝（６－３号周溝）と住居址１（６－１号住居）、土壙１（６－２号



第8図　6－2号土壙（1／20



第9図　5－1号集石と縄文土器（集石は1／20・土器は1／2）

土壙）が検出できた。６－１号住居址は一辺４ｍの正方形で、東側壁に間仕切部がある。中には大量の炭があり、壁沿いに立つ木材もあるため焼失した建築材の一部と推測できる。供伴する土器から古墳時代前期の住居と想定できる。６－３号周溝は幅2.5ｍで、深さ約20㎝である。周溝全体の約2/3を調査し、須恵器杯身１、同高坏２、𤭯１、甕１、堤瓶１、土師器高坏、甕が検出できた。須恵器のＴＫ209型式平行期から隼上りⅡ段階併行期までの遺物が混在している。

６－２号土壙は６－１号住居を掘削し、長軸が国指定66号墳の周溝に沿うように造られている。径約1.5ｍの楕円形で、検出面から深さ約80㎝である。底部から馬具（楕円形鏡板付轡１対・兵庫鎖１対）が検出できたため、馬の埋葬土壙と考えられる。

Ⅲ．まとめ

これまで祇園原地区遺跡では縄文から中世までの各種遺構が確認されており、今回の調査はそれらを補強し、台地上の遺跡分布を広げることができた。

５次調査で検出できた集石遺構は台地西端部に位置する瀬戸口遺跡(1)と関連し、台地端部における縄文時代の遺構の広がりを予見させる。

同じく５次調査の５－１号住居と６次調査の６－１号住居からは弥生時代中期から古墳時代前期までの遺跡全域が集落であったことを予見させ、高位台地面にある周溝墓・土壙墓を中心とした川床遺跡(2)との関連が興味深い。

６次調査では周溝とそれに付随する馬の埋葬土壙が検出できた。同種の埋葬土壙は１次調査でも４基確認されており(3)、今回の調査もあわせて６例に達する。祇園原古墳群の中小円墳の被葬者像に迫る重要な確認事例である。

今回の調査は一般農道という比較的幅の狭い範囲の調査であるが、遺跡全体に長いトレンチを入れるという観点で同種の調査を継続すれば、古墳群の内容を知りうる重要な知見を与えてくれる。今後の調整を継続していく。

なお、一般農道整備事業は来年度以降継続する予定であるため、事業完了後に発掘調査の本報告を刊行する予定である。

(1) 日高孝治ほか「瀬戸口遺跡・新田原遺跡・蔵園地下式横穴墓」『新富町文化財調査報告書』第４集　新富町教育委員会 1980

(2) 有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第５集　新富町教育委員会 1988

(3) 谷口武憲ほか「祇園原地区遺跡」『県営総合パイロット事業尾鈴Ⅱ期地区事業（祇園原工区）にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1996

4．越馬場遺跡

Ⅰ．位置と調査の概要

新富町の市街地は国道10号線の改良以降、丘陵掘削や河川改修などでかなりの変貌を遂げている。この土地区画整理では、昭和43年の下屋敷古墳(1)の調査以降、河川改修に伴う鬼付女西遺跡(2)、園田遺跡(3)、富田１号墳(4)などの調査が行われ、弥生時代中期から近世にいたる重要な遺跡の存在が判明している。今回の越馬場遺跡における丘陵の削平は区画整理の最終段階である。

越馬場遺跡がある丘陵は、もともと新田原台地から東に派生した標高40～20mの高まりの続きである。あたかも独立丘陵の連続のようにみえる現在の光景は道路や河川改修の結果であり、旧地形が残る場所は少ない。

今回の調査域周辺では昭和40年代に蔵骨器が出土したといわれ、宮崎県立総合博物館で所蔵される同品は13世紀後半の常滑焼である(5)。また慶長年間までには創建されていた弥勒寺（明治４年廃寺）(6)や富田八幡神社も近接し、中近世の遺跡が多い。

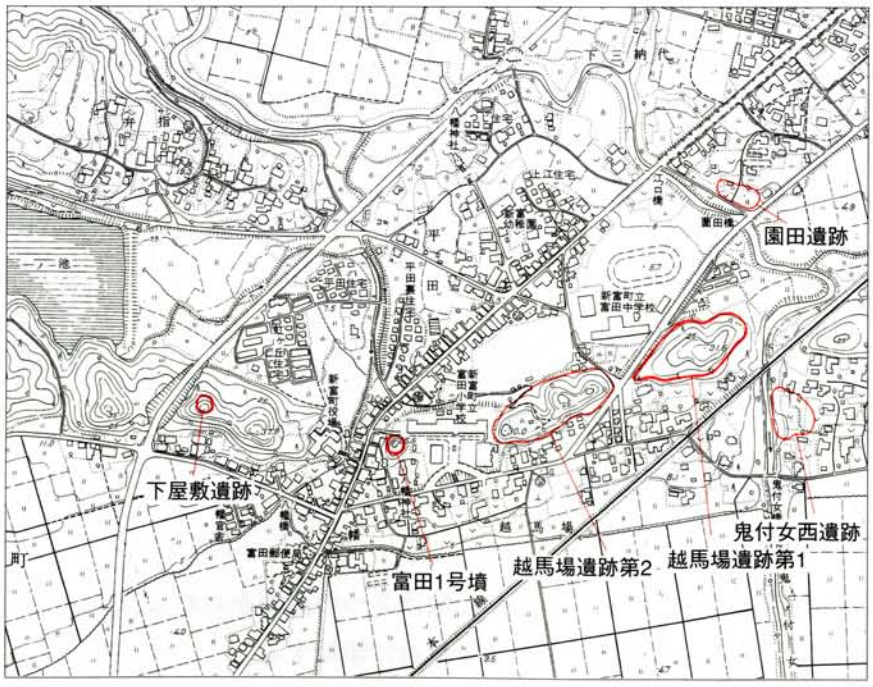
本年度の工事区域は旧国道10号線東側の南北60m、東西90mの面積約3,140㎡である。全体に周囲が削平されており、もともとは西側が丘陵と連続し、東側は急崖になっている。

今回の調査区では曲輪と付随する堀が検出でき、曲輪上と堀の埋土から土器片２点が出土した。

Ⅱ．遺構と遺物

①　遺構

調査区中ほどには谷があり、これを挟んで２つの高まりがある。北側の頂上には約400㎡の平坦面があり、周囲は急峻な傾斜面になっている。平坦面は東西約16m、南北約20mの長方形を呈し、肩部の形状から人工的な造成が行われた「曲輪」であると考えられる。曲輪上には土塁などの高まりはなく、全面の表土を除去し遺構検出に努めたが、建物の堀方は確認できなかった。



第10図　越馬場遺跡と周辺の遺跡（昭和40年頃・1／10,000）

曲輪西側と南側の直下には堀が掘られていた。いわゆる薬研堀で、現地表面から2.5m～1.0m掘り込んでいた。

堀からは土器片１点が検出でき、曲輪上埋土で検出した破片と同一個体と想定できる。

また曲輪の東側は大きく削平されており、昭和40年の区画整理以

第11図　越馬場遺跡（1／400）

前はもう一つ東に高まりが存在したという。このことから山城は2つの曲輪からなり、周囲に堀を巡らした構造が想定でき、本町で見られる山城の典型的な構造に類似する。

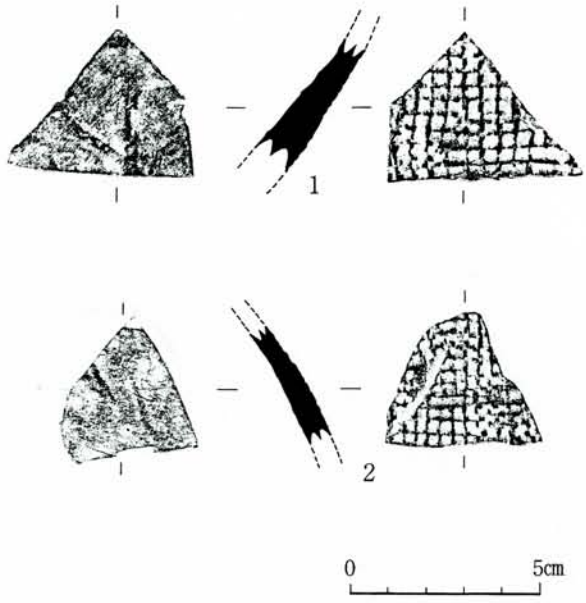
西側の高まりには五輪塔が６基並列してあったが、山城築造より下り江戸時代後期の所産と考えられ、別の場所から移築したもののようだ。

② 遺物

土器片２点（第11図）が出土した。先述のとおり曲輪上と堀内の埋土で同一個体の可能性が高い。

２片とも外面に格子状のタタキを施し、内面は宛具痕をナデ消している。内外面ともに青灰色を呈し焼成は堅緻である。径１～２㎜の白色粒を多く含んでいる。

口縁や底部の形状は判然としないが、常滑焼の可能性が高い。



第12図　出土土器（１/２）

Ⅲ．まとめ

町内で確認できる中世山城は本例を含めて８箇所である。これらのうち越馬場遺跡と構造の類似するものには上日置城、富田城下ノ城がある。いずれも台地面端部を切断し、２つの曲輪を造成した構造に共通点がある。

越馬場遺跡は鬼付女川流域に位置し、北の三納代地区、南の富田地区を見渡す好位置にある。文献上には登場しないが、地域の勢力が仮設的に築造した砦的な施設と考えてよいだろう。

(1) 新富町教育委員会「下屋敷古墳発掘調査概報」『宮崎考古』第７号　宮崎考古学会1980
(2) 永友良典「鬼付女西遺跡」『宮崎県史』資料編考古２　宮崎県 1993
(3) 永友良典「園田遺跡」『宮崎県史』資料編考古２　宮崎県 1993
(4) 有馬義人「富田１号墳」『新富町文化財調査報告書』第23集 1997
(5) 東憲章「宮崎県の常滑焼集成」『宮崎考古』第13号 1996
(6) 「新富町史」資料編 1992

1．1号周溝（北から）

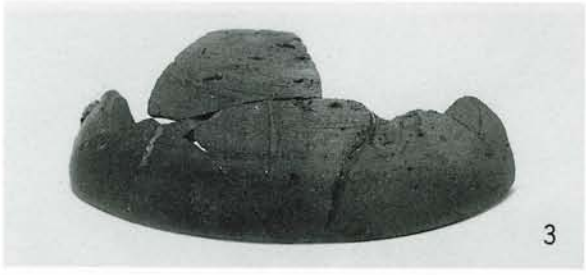
2．周溝内の土器出土状態

3．1号周溝（南から）

4．周溝の埋土

1

2


3

4

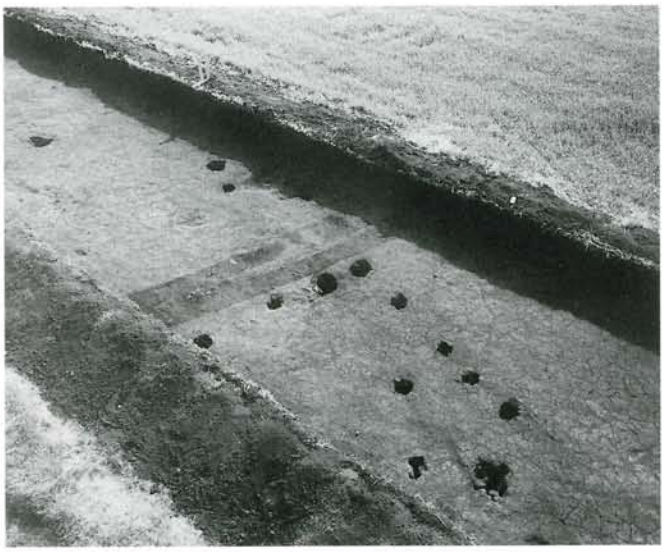
5

8

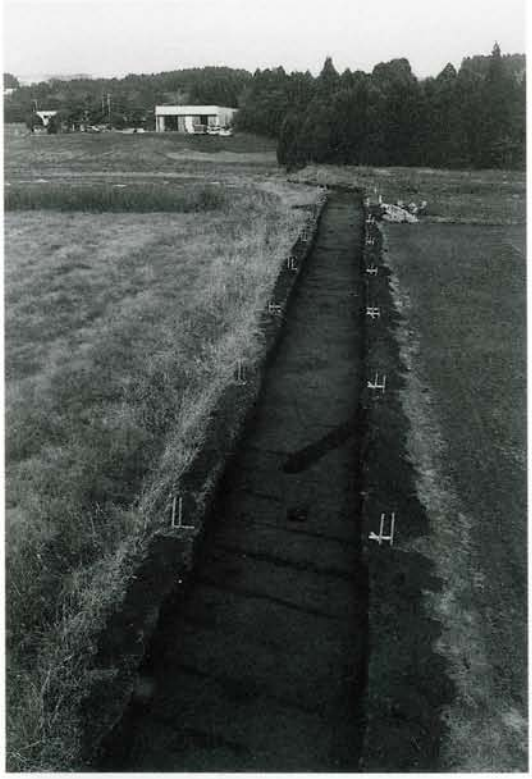
9

図版三　祇園原地区遺跡（第五次）

1．5次調査（18号線）



2．5次調査



3．5次調査（19号線）

4．5次調査（19号線）5－2号土壙

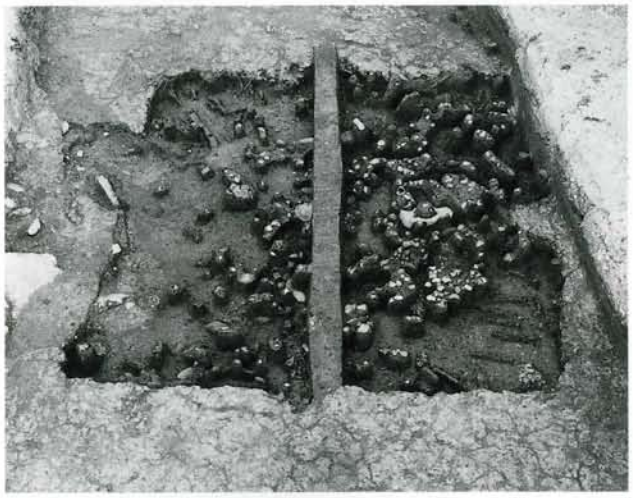
5．5－1号集石

1．6次調査（1区）

2．6－1号土壙

3．6－1号土壙

1．6次調査（2区）



2．6－1号住居

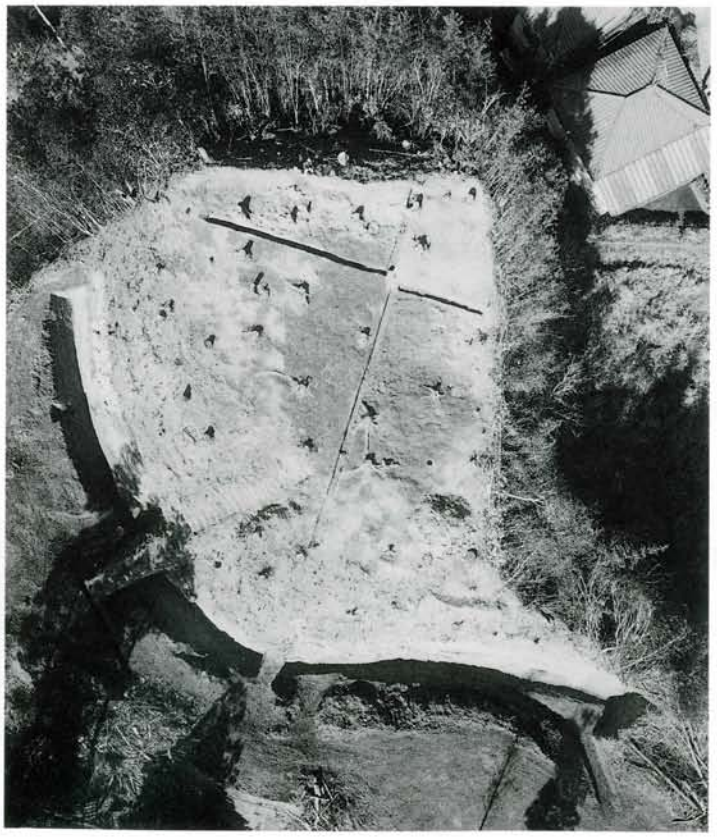
3．6－1号住居炭化材

4．6－3号周溝

5．6－2号土壙

6．6－2号土壙

1．越馬場遺跡（東から）



2．曲輪と堀

3．堀

4．堀

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちょうないいせき
書 名	町内遺跡16
副 書 名	平成11年度町内遺跡発掘調査概要報告書
巻 次	16
シ リ ー ズ 名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第29集
編 著 者 名	有馬義人
編 集 機 関	新富町教育委員会
所 在 地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発 行 年 月 日	2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
春日（かすが）地区遺跡	大字新田字春日（おおあざにゅうたあざかすが）	47	1001	990427 ↓ 990630	2,000m²	畜舎建設
祇園原（ぎおんばる）地区（ち く）遺跡 第４・５・６次	大字新田字祇園原（おおあざにゅうたあざぎおんばる）	47	1001	990701 ↓ 991221	6,810m²	一般農道
越馬場（こえんばば）遺跡	大字上富田字越馬場（おおあざかみとんだあざこえんばば）	47		991201 ↓ 000131	3,140m²	区画整理

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
春日地区遺跡	古 墳	古墳時代	円墳周溝	須恵器 土師器 子玉	消滅墳の周溝
祇園原地区遺跡 第４・５・６次	古 墳	古墳時代	集石遺構 古墳周溝 竪穴住居	縄文土器 土師器・須恵器 馬具	馬の埋葬土壙
越馬場遺跡	山 城	中 世	堀、曲輪	陶器	町内８カ所目の中世山城

新富町文化財調査報告書　第29集

町　内　遺　跡　16

発行年月日　２０００年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ